

副詞の研究(I)

半田一吉

School grammar では、副詞は動詞、形容詞及び他の副詞を修飾する品詞であるとされ、Jespersen の3つの rank で云えば、主として tertiary word, 即ち subjunct である。併し時には名詞や形容詞と同等の働きをし、特に predicate の中で adjunct として用いられることが多いのは、どの文法書にも指摘される通りである。本小論に於ては、副詞がどの程度本来の働きをし、どの程度他の領域に侵蝕しているかを、実例と統計によって示そうとするものである。尚ここでは前置詞を伴う副詞句、副詞節及び原則として副詞の目的を除外する。併し by and by のように副詞を中心とした語群で、2語以上が集って一つの副詞に匹敵するものは含めて扱う。

副詞の機能を始めに全部列挙すると次の16種ある。

- (1) 文全体の修飾
- (2) 文の接続
- (3) 動詞の修飾
- (4) 形容詞の修飾
- (5) 副詞の修飾
- (6) 名詞の修飾
- (7) 分詞の修飾
- (8) 不定詞の修飾
- (9) 句の修飾
- (10) 従属節の修飾
- (11) 動詞副詞結合
- (12) 文副詞
- (13) 補語
- (14) Preparatory There
- (15) 名詞用法
- (16) 句形成

I 諸用法の頻度

上掲の16の用法を、次の4つの資料について、用例の数を調べてみると次のようになる。何れも

最初の3,000語について数えたもので、3,000語はB 6版のほぼ10ページ分に当る。

- (A) The Authorized Version: *St. Mark*
(1611 A.D.)
- (B) Washington Irving: *The Haunted House*
(1822 A.D.)
- (C) Arnold Toynbee: *The World and the West* (1952 A.D.)
- (D) Newsweek, Oct. 28, pages 38~40 (1968 A.D.)

(A)と(C)は英国、(B)と(D)は米国のものである。(A)のマルコ伝はIV章31まで、(B)(C)は何れも研究社の叢書で、P.11, L.30 (…carry her Bible. まで)とP.12, L.1 (…Russia, not まで)で、後者は Preface を含む。尚(D)として、マルコ伝I~X章(約1万語弱)について数えた数も並記する。(表I)

副詞の数は、3,000語中174~206となっている。即ち全単語の中、6~7%を副詞が占めているわけである。この比率は他の文献について見てもほぼ変わらず、正確に3,000語ではないが、同じページ数で数えた次の場合について見ても明らかである。

- | | |
|--|-----|
| Carlyle: <i>Mahomet</i> (1841 A.D.) | 209 |
| Bertrand Russell: <i>Religion and Science</i>
(1935 A.D.) | 208 |
| Gissing: <i>Henry Ryecroft</i> (1903 A.D.) | 192 |

この中で圧倒的に多いのは文修飾の場合で、副詞全体の中で16~43%を占めている。それに次いで動詞副詞結合であるが、これは最も多い(A)と最も少ない(C)とでは3倍以上も違う。語修飾の中で断然多いのは動詞の修飾で、副詞全体の10~14%に当る。その他の品詞では資料によって差が大きい。Preparatory there は、語修飾、句修飾に次いで安定した頻度を保っている。

表 I

		A	B	C	D	E	B + C + D + E
1	文 修 飾	31	60	74	44	162	340
2	接 続	37	28	10	19	73	130
3	動 詞 修 飾	27	24	18	19	70	131
4	形 容 詞 修 飾	0	15	12	21	17	65
5	副 詞 修 飾	3	8	9	8	13	38
6	名 詞 修 飾	8	3	9	8	19	39
7	分 詞 修 飾	1	7	1	9	6	23
8	不 定 詞 修 飾	0	2	1	0	0	3
9	句 修 飾	6	11	15	6	13	45
10	節 修 飾	0	2	0	0	0	2
11	動詞副詞結合	56	30	16	27	148	221
12	文 副 詞	1	3	0	0	3	6
13	補 語	6	0	3	4	11	18
14	準備の there	13	9	3	7	31	50
15	名 詞 用 法	2	1	1	3	8	13
16	句 形 成	0	3	2	1	2	8
	計	191	206	174	176	576	1,132

II 種類別に見た副詞の頻度

ここでは B, C, D, E を合計した 1,132 の副詞について、副詞の意味による分類に従って、その頻度を調べてみる。

(1) 文修飾副詞

Sweet の云う Sentence-modifying adverb で Curme のように Sentence adverb と呼ぶ人もある。単一の語句ではなくて、文全体を修飾するものであるが、動詞修飾を始めとして、他の場合と区別が困難なものが少くない。副詞の意味上の分類は、Sweet に従って、場所の副詞、時の副詞、度合の副詞、様態の副詞、原因の副詞、確言の副詞の 6 種とする。語数では、時(34)、様態(15)、度合(12)、確言(5)、原因(2)、場所(1)の順で、延べ使用回数では、時(130)、確言(118)、度合(50)、様態(23)、原因(18)、場所(1)の順になる。どちらに於ても時の副詞が一番多い。(尚、表 I の数は、頻度を示すものであるから、語数ではなくて回数である。)

次に種類ごとに列挙する。() 内の数字は使用回数である。

(場所) all over (1)

(時) now (16), never (14), today (13), always (11), immediately (8), still (6), already (5), sometimes (5), now and then (5), often (4), then (4), yet (4), no more (4), ever (3), soon (3), straightway (3), suddenly (3), earlier (2), once (2), afterward, ago, just, later, oft, oftentimes, eventually, recently, all along, any more, by and by, not ever, not yet, never yet, sometime or other, (以上各 1)

(度合) also (17), again (15), neither (5), first (3), more (2), rather (2), besides, hardly, only, rarely, too, worse, (以上各 1)

(様態) verily (8), continually (2), instead, likewise, apparently, essentially, easily, generally, incessantly, obviously, perpetually, rightly, seemingly, unfortunately, unhappily, (以上各 1)

(原因) why (17), therefore (1)

(確言) not (91), -n't (10), indeed (9), perhaps (5), certainly (2), peradventure (1).

単純副詞又は一次副詞の多いのは時と度合で、形容詞から派生した ly 副詞の多いのは様態であることは、歴然としている。

(2) 接続副詞

However のように、厳密に云って接続副詞と呼ばれるものの他に、それに準ずる働きをしていると考えられるものをもここに含んでいる。これも広い意味では、一種の文修飾であるが、等位接続詞的な意味をもっている。ただ接続詞とは違って、その位置が固定せず、かなり自由に動くことができる等、副詞の機能を失っていない。又屢々接続詞と共に用いられ、and の後に続くものが特に多い。ここで扱った資料中には、but~ が一つだけ見られたが、あとはすべて and であったので、and に続くものだけ別に分けて列挙してみる。又関係副詞のように、従属節を導くものもここに含めることとし、第 3 のグループにまとめてみた。

(i) 単独で用いられるもの

(時) now (3), then (3), meanwhile (1)

- (度合) moreover (2), first, so, (各1)
 (様態) else (2)
 (原因) then (7), however (6), so (6), yet (6),
 therefore (5), so that (4), howbeit (2),
 though (2)
 (ii) And と共に用いられるもの
 (時) and straightway (13), and immedi-
 ately (9), and then (5), and forthwith
 (3), and anon (1)
 (原因) and therefore, and then (各1)
 (iii) 従属節を導く関係副詞, 疑問副詞等
 (場所) where (16), wherein, wheresoever,
 whithersoever, whence (以上各1)
 (時) when (6), whenever (1)
 (度合) insomuch (6), as though (1),
 (様態) how (6)
 (原因) now that (2), why (2), wherewith (1)
 (iv) その他
 (度合) either (1)

全体として、確言の副詞は一つも現れず、原因に関するものと、時に関するものが多い。語数では、原因(13)、時(10)、度合(6)、場所(5)、様態(2)で、回数では、原因(45)、時(45)、場所(20)、度合(12)、様態(8)の順である。又この用法は(A)に於て、他の三つよりも、比較にならぬ程多いのも注目される。一つには、新しくなるほど口語の影響が大きくなっているとも考えられる。

(3) 動詞修飾

文修飾と動詞副詞結合に次いで多く、語修飾副詞中では最も多く、接続の場合とほぼ同数で、各資料とも(2)と(3)とは、殆ど同数に近い。これはこの場合だけの偶然ではなく、他の多くの場合を見ても、この傾向ははっきり見られる。様態の副詞が最も多く現れるのは動詞修飾で、又動詞修飾副詞中、語数回数共最も多いのも様態の副詞である。又その大部分をly副詞が占めている。

- (場所) there (10), round about (5), here (3),
 thence (3), abroad, behind, downwards,
 farther, hither and thither, nigh, round,
 therein, thither, whereunto, without, (以
 上各1)
 (時) longer (2), a while, before, sooner, (以
 上各1)

- (度合) first (3), almost (2), a little (2), much
 (2), even, further, deeply, heavily, mere-
 ly, only (以上各1)
 (様態) together (13), well (6), greatly (4),
 how (4), straitly (3), askance (2), deliber-
 ately (2), hard (2), openly (2), privately (2),
 quietly (2), afoot, ajar, along, high, right,
 plain, so, sore, still, thus, wholesale, wild,
 clearly, consciously, diligently, easily,
 exceedingly, firmly, gladly, heartily,
 hopefully, lightly, literally, peacefully,
 shrewdly, simply, slowly, sorrowfully,
 studiously, tolerably, willingly, wistfully,
 unconsciously, violently, warmly, (以上各
 1)

(原因) thereof, wherewith (各1)

語数では様態(46)、場所(15)、度合(10)、時(4)、原因(2)、回数では、様態(77)、場所(32)、度合(15)、時(2)、原因(2)となっている。

尚 Jespersen によれば、fast, slow, easy, quick 等の形容詞は、quasi-predicative として運動の動詞の後に来ると、副詞とみなされる。(go fast, go easy 等)

(4) 形容詞修飾

動詞及び副詞の修飾と共に、副詞本来の機能を果すもので、数もかなり多い。(A)でOになっているのは偶然で、マルコ伝中에서도X章まで見れば17例ある。併し概して聖書中には少いことも確かである。圧倒的に多いのは度合の副詞で、様態と同様ly副詞が極めて多い。もっとも、度合及び様態に於て、ly副詞は語数は多いが、回数では単純副詞の方が多い。語数では、度合(21)、様態(7)、確言(2)、回数では度合(48)、様態(15)、確言(2)で、時、場所、原因はOである。

- (度合) more (9), as (8), about (7), most (3),
 very (3), exceeding (2), just (2), a little,
 all but, enough, far, much, so, sore, wide,
 equally, exceedingly, fairly, mostly, nearly,
 totally, (以上各1)
 (様態) how (9), mutually, predominantly,
 primarily, really, reasonably, stiffly. (以
 上各1)
 (確言) no (1), not (1)

(5) 副詞修飾

他の副詞を修飾するもので、(3) (4) に比べると数はかなり少い。原因と確言に関するものはなく、語数では、度合(15)、場所(4)、時(2)、確言(2)。回数では、度合(26)、時(5)、場所(4)、確言(3)。度合の副詞が多い点は形容詞修飾と似ているが、ly 副詞は少くて、単純一次副詞が多い点が異なる。

(場所) afar, close, far, farther (各1)

(時) once (3), soon (2)

(度合) the (8), too (3), as (2), so (2), any, all, all too, a little, enough, fairly, full, much, only, soever, very, (以上各1)

(確言) not (2), no (1)

(6) 名詞修飾

これは勿論、本来は形容詞の機能であるが、形容詞から転用された副詞は云うに及ばず、本来の副詞にもこのように用いられる場合が少からずある。ここでは、辞書に形容詞の明示があるものは除く。語数では、度合(12)、場所(4)、時(3)、様態(1)、確言(1)。回数では、度合(28)、場所(5)、時(3)、様態(1)、確言(2)である。

(場所) round about (2), everywhere, round, without, (以上各1)

(時) then, today, so far (各1)

(度合) even (5), only (5), also (3), as (3), too (3), alone (2), but (2), about, as well, just, mostly, quite (以上各1)

(様態) together (1)

(確言) not (2)

(7) 分詞修飾

現在分詞、過去分詞共に形容詞に準じるが、条件が形容詞の場合と常に同じではない。受動態の過去分詞を修飾している場合は、動詞修飾の裏返しと考へて、ここでは扱はないが、何れに解釈すべきか迷う場合も屢々ある。語数は、度合(11)、様態(7)、場所と確言各1。回数は、度合(14)、様態(7)、場所と確言各1で、形容詞と同傾向だが、数はずっと少い。

(場所) here and there (1)

(度合) far (2), much (2), so (2), all, all but, even, more, most, never, nothing, (以上各1)

(様態) again, well, carefully, culturally, particularly, strongly, universally (各1)

(確言) not (1)

(8) 不定詞修飾

句の中に入れてもよいものだが、一応別個に扱った。数は少く、度合、様態、確言が各一つずつ見られるだけである。

(度合) too (様態) how (確言) not

(9) 句修飾

主として前置詞で導かれる phrase の修飾であるが、前置詞をもたないものも若干ある。数は何れの場合もかなり多く、副詞や名詞の修飾を上廻る。語数では、度合(15)、様態(4)、確言(3)、場所と時各1。回数では、度合(27)、確言(11)、様態(5)、場所と時各1である。

(場所) up (1)

(時) ever(1)

(度合) also (4), but (4), only (3), again (2), almost (2), even(2), more (2), about, all, so, soever, completely, entirely, largely, partly, (以上各1)

(様態) how (2), necessarily, particularly, respectively, (以上各1)

(10) 節修飾

名詞節、形容詞節又は副詞節を修飾するものである。等位節の場合は、文修飾の中に数える。数は極めて少く、(B)の中に度合の副詞が二つ見られるだけである。

(度合) even, long (各1)

(11) 動詞副詞結合

動詞修飾の場合が発展して、本来の副詞の意味を動詞に添える段階から進んで、遂には両者の合体によって、全く新しい意味を生ずるに至る。その結びつきの密接さによって(3)と(11)とを分けることになるが、絶対的な区別はつけ難い。3音節以上の副詞はここには入れず、2音節以下の副詞は、原則としてここに含める。数は極めて多く、文修飾に次ぐ頻度をもっている。動詞も副詞も共に、ゲルマン系の単音節語が殆どを占めている。(この用法については、A. G. Kennedy の詳しい研究がある。)近年ラテン系の多音節動詞に代って、動詞副詞結合が用いられることが益々多くなっていると云はれるが、ここに現れた限り

では、最も古い(A)が他をひき離して多い。先に副詞総数を示した Russell の *Religion and Science* では、3,000 語中に僅か3例しかない。統計は自動詞と他動詞に分けて示す。場所の副詞が殆ど全部を占めており、その他には様態の副詞が自動詞他動詞共に1例ずつ見られるだけである。自動詞では語数が場所(15)、様態(1)、回数が場所(114)、様態(1)。他動詞では語数が場所(13)、様態(1)、回数が場所(105)、様態(1)である。各副詞ごとに並用されている動詞を()内に示す。

〔自動詞の場合〕

(場所) out 39 (go 17, come 10, cry 3, depart, die, get, grow, look, set, slip, turn, walk, 以上各1)
 up 23 (go 4, grow 4, look 4, catch 2, rise 2, spring 2, bristle, come, hold, put, take, 以上各1)
 down 12 (come 5, sit 4, fall 2, kneel 1)
 forth 9 (go 5, come 3, stand 1)
 in 5 (come 3, enter 2)
 on 5 (go 4, get 1)
 about 4 (cast, come, gallop, turn, 各1)
 away 4 (go, pine, take, wither, 各1)
 over 4 (come 2, pass 2)
 abroad 2 (come, spread, 各1)
 ahead 2 (shoot 2) around 1 (go)
 nigh 1 (come) along 1 (help)

(様態) asunder 1 (put)

〔他動詞の場合〕

(場所) up 30 (take 11, bring 3, break 2, give 2, keep 2, lift 2, set 2, devour, dry, fill, hold, lead, strike, 以上各1)
 out 19 (cast 9, belt, give, help, pluck, put, reason, spell, stretch, strike, transfer, 以上各1)
 away 18 (send 9, put 4, lead 2, take 2, cast 1)
 forth 11 (bring 4, send 3, cast, put, shew, stretch, 以上各1)
 down 5 (beat, keep, let, put, shut, 各1)
 off 5 (cut 2, lop, play, take, 以上各1)
 over 4 (pass, pore, rule, turn, 各1)

in 3 (put, send, throw, 各1)
 aside 3 (lay, sweep, take, 各1)
 about 2 (carry, turn, 各1)
 abroad 2 (blaze, spread, 各1)
 into 2 (put, turn, 各1)
 apart 1 (split)

(様態) through 1 (put)

以上であるが、自動詞他動詞合せて特に多い副詞は、out (58), up (53), away (22), forth (20), down (17), in (8), over (8), about (6), on (5), off (5)である。動詞では go (32), come (28), take (17), send (13), cast (11), put (10)等。以上であるが、動詞と副詞との結合の性質や度合による分類、或いは動詞副詞結合と単独の(特に多音節)動詞との頻度の比較等も、いずれ行ってみたいと思う。

(12) 文副詞

Curme の云う Sentence adverb ではなくて、Sweet の云うそれである。即ち副詞1語で以て、一つの文に匹敵する働きをするもの。全部確言の副詞で、nay (3), no (2), yes (1)である。尚ここには現れなかったが、Why? How? の如く、疑問詞が単独で疑問文を構成する場合もここに入る。

(13) 補語

形容詞と同様に Predicate の補語として用いられる。Be 動詞が圧倒的に多い。目的補語の例も若干ある。ここでは主格補語は be だけだったので、be動詞の場合と目的補語の場合に分けて列挙する。

〔Be 動詞の場合〕

(場所) behind (2), here (2), without (2), there (1), up (1)

(度合) enough (1)

(様態) how (3), so (1)

〔目的補語の場合〕

(場所) behind (2), inside (1), off (1)

(様態) abreast (1)

両方合せて、語数では場所(8)、様態(3)、度合(1)。回数では場所(12)、様態(5)、度合(1)。尚この補語については、後程別の角度からも検討を加える。(Ⅲ参照)

ところで、副詞が補語として用いられた場合、

それを副詞と見るか、形容詞と見るかが、微妙な問題となってくる。例えば、School is over. のような場合の over については、日本の辞書では皆、adv. の他に、noun, prep., verb の表示しかないが、Webster ではこの他に adj. として、game is over. の用例をあげている。NED では、a. の表示があるが、これは the over ende..., with over drapery of... のような場合で、...is over の用例があるのは、adv. のIV, 14の項である。Jespersen は、Predicative になり得るものは、(1) substantive (2) adjective (3) pronoun (4) adverb 及び prepositional groups としており (MEG, III. p. 389) この (4) の場合は通常 subjunct だが、predicative としても用いられ、その何れであるか屢々見分け難いと云っている。She sings well. では、well は sings の様態を示しているから subjunct であり、She is well. では、well は nexus のなくてはならぬ secondary part であるから predicative で、前者は tertiary、後者は secondary という結論である。Curme は、副詞は屢々形容詞の如く用いられるとして、How are you? He is not in. He is about to take the step. 等の例をあげている。(Parts of Speech, P. 73)

(14) Preparatory There

元来は補語だと思われるが、独特の性質もっていて、数も多い。動詞は be 動詞が多いが、他の動詞も数種見られる。ここでは副詞の分類は問題外であるから、動詞別に数を示す。受動態が2例ある。

be (34), come (7), appear (2), go (2), arise (1), live (1), meet (1), be given (1), be gathered (1)

(15) 名詞用法

前置詞の目的になっている副詞で、語数では場所 (5), 時 (3), 様態 (1), 回数では場所 (9), 時 (3), 様態 (1)。

(場所) thence (3), whence (2), within (2), down (1), upward (1)

(時) before, late, now, (各 1)

(様態) how (1)

尚 quotation の中に入って名詞扱いされるのは、どのような語でも可能であるので、ここでは

問題にしない。Curme は "the ups and downs of Life" のような例をあげている。

(16) 句形成

前置詞句又は接続詞句を作るもので、形容詞又は副詞を修飾する as, so が、接続詞の as と結びついて、as~as 又は so~as の形で、特に密接な連がりを持ち、特有の意味を生ずるに至ったものである。従って、これは形容詞修飾、副詞修飾の中で取扱ってもよいものなのである。実際問題として、as long as, as well as, ss much as, so far as の4つにつきる。これを、例えば as many as などと別個のものとする必要があるかどうか疑問であるが、やはりこの4つは long, far, much, well の本来の意味に留まらないで、他に替えることの出来ない固定した句になっていると考える。

(度合) far (3), long (2), much (1)

(様態) well (2)

以上で、総語数363, 数回数1,132であるが、語数と回数とに分けて表にすると次のようになる。

表 II

		場所	時	度合	様態	原因	確言	計
1	文 修 飾	1	34	12	15	2	5	69
2	接 続	5	10	6	2	13	0	36
3	動 詞 修 飾	15	4	10	46	2	0	77
4	形 容 詞 修 飾	0	0	21	7	0	2	30
5	副 詞 修 飾	4	2	15	0	0	2	23
6	名 詞 修 飾	4	3	12	1	0	0	20
7	分 詞 修 飾	1	0	11	7	0	1	20
8	不 定 詞 修 飾	0	0	1	1	0	1	3
9	句 修 飾	1	1	15	4	0	3	24
10	節 修 飾	0	0	2	0	0	0	2
11	動 詞 副 詞 結 合	28	0	0	2	0	0	30
12	文 副 詞	0	0	0	0	0	3	3
13	補 語	8	0	1	3	0	0	12
14	準備の there	1	0	0	0	0	0	1
15	名 詞 用 法	5	3	0	1	0	0	9
16	句 形 成	0	0	3	1	0	0	4
	計	73	57	109	90	17	17	363

表Ⅲ

		場所	時	度合	様態	原因	確言	計
1	文 修 飾	1	130	50	23	18	118	340
2	接 続	20	45	12	8	45	0	130
3	動 詞 修 飾	32	5	15	77	2	0	131
4	形 容 詞 修 飾	0	0	48	15	0	2	65
5	副 詞 修 飾	4	5	26	0	0	3	38
6	名 詞 修 飾	5	3	28	1	0	2	39
7	分 詞 修 飾	1	0	14	7	0	1	23
8	不 定 詞 修 飾	0	0	1	1	0	1	3
9	句 修 飾	1	1	27	5	0	11	45
10	節 修 飾	0	0	2	0	0	0	2
11	動詞副詞結合	219	0	0	2	0	0	221
12	文 副 詞	0	0	0	0	0	6	6
13	補 語	12	0	1	5	0	0	18
14	準備の there	50	0	0	0	0	0	50
15	名 詞 用 法	9	3	0	1	0	0	13
16	句 形 成	0	0	6	2	0	0	8
	計	354	192	230	147	65	144	1,132

(表Ⅱ, (B)(C)(D)(E)の副詞の語数)

(表Ⅲ, (B)(C)(D)(E)の副詞の頻度数)

Ⅲ NED, Authorized Version, その他に於る副詞補語の用例

COD及びNEDに共通に出てくる副詞で、a及びbを頭文字とするものが、それぞれ135と66ある。(CODではab extra, ad verbum, a huis clos等、主としてラテン語及びフランス語のphraseを、副詞として表記しているが、これらの殆どはNEDには単語としては載っていないので、ここには含めない。)この201例の副詞で、be動詞の主格補語として用いられた用例がNED中に見られるのは、adv.の他にpredicative adj.の表示のあるもの35, adj.でもあることを明示されているもの28を除いて、次の各語である。

- abaft, abed, about, above, abreast, abroad,
- across, ad libitum, adown, afield, agaze,
- along, alow, already, anew, apart, around,
- astern, asunder, ataunto, away, back, beforehand, behind, below, beneath, besides,

between, betwixt, beyond, but, by, by and by, の33例, 即ち全副詞中の約6分の1である。この他に abask, ahull, ashore, backwards には, be 動詞以外の動詞の補語としての用例がある。勿論用例の載っていないものは, すべてこのような用例がないという断定は出来ないが, 上例の中にも幾つかの傾向が見出せる。先ずbeの補語になる副詞は, 一次副詞と呼ばれる simple な形態のものと, phrase から来たものが多く, 形容詞等からの派生によるもの, 特に -ly で終るものが少いことである。併し次のような例もある。

It is rarely, indeed, that such fascination can be exerted by a priest. (Hearn: Kokoro)
これは次の文と比較し得る。

It is rare that these two virtues are united in the same person. (College Crown Dictionary)
逆に rare が副詞として用いられた例もある。

a rare good wine

上に述べた201の副詞中には, -ly のつくもので, predicative として用いられたものはない。その代り phrase から派生したものは多い。もっともこれは a という項目の特殊性でもある。即ち on 一という phrase が a 一となったものが多いからである。(on ground→aground, on char→ajar等)

實際上補語となる副詞は, ごく限られたものが大部分を占めている。先ず聖書の Authorized Version に例を求めると, 旧約のザカリア書全体で, where 2, therein 1, so 1 の計4例があり, 新約ヨハネ伝1~10章中に, there 4, whence 5 so 1, where 9, how 3, herein 1 の23例がある。これを補語として用いられる他の品詞と比較すると次のようになる。(何れもbe動詞のみについて) 尚ここでは Preparatory there は副詞と別項目に数える。

	名詞	代名詞	形容詞	副詞	there	不定詞	分詞	句	節	計
(Zec.)	41	16	20	4	13	1	11	40	1	147
(John)	114	28	57	23	21	2	36	58	0	339

これを percentage で表はせば:

	名詞	代名詞	形容詞	副詞	there	不定詞	分詞	句	節	計
(Zec.)	27.9	10.9	13.6	2.7	8.8	0.7	8.1	28.0		
(John)	33.6	8.3	16.8	6.8	6.2	0.6	11.2	17.1		

不定詞と節とを単独に数えず，preparatory *there* を含まない時，ゼカリア書とヨハネ伝の平均値では，副詞補語は最も少い項目である。（尚ゼカリア書には，この147例の他に，S-V 構文205例，S-V-O 構文279例，S-V-O-O 構文15例，S-V-O-C 構文30例，受動態構文60例がある。S-V-O-Cを補語，目的語の両方に数え，受動態を何れからも除外すると，補語を含む文は177，目的語を含む文は324，どちらも含まぬ文は205で，補語構文が1番少く，目的語構文の約半分である。）

最後に若干の用例を示す。

A prophecie sais he salle die & whan he is ouere, After þat day Scotlond may haf gode recouere. (1330, R. Brunne: Chronicle)

Ich wæs on bedde. (=abed) (1205, Layamon)

The operation...is slow, and as it were about. (1651, Bacon, tran.)

To bring al this werre a doune. (=adown) (1430, Syr Generides)

Al redy was his answer. (=already) (1386, Chaucer)

Heo wepen heore leoten þe scucke wes bitweonen. (=between) (1205)

The end is not by and by. (1611, Authorized Version)

The black horses which are therein go forth into the north country; (Zechariah, VI 6)

And so shall be the plague of the horse,... (ibid. XIV 15)

...and the mother of Jesus was there: (John, II 1)

...and where I am, thither ye cannot come. (ibid. VII 34)

(後記) ここではっきりした結論を出すには，まだ資料の数が十分ではない。更に多くの実例を調査した上にしたいと思う。Ⅱの各論では，用例を一々あげる余裕がないので，単語だけの記載にとどめた。又単語は全部列挙する必要もないかと思はれるが，分類の仕方に異論もあると思うので，はっきりさせるために全部列挙したのである。以上の点を更に押し進めると共に，副詞の文中に於る位置の問題を，次には取り上げてみたいと思う。